

諸

十三
佛



横

子

見ても

加

見ても

力

柄

似



為朝や名も美あ代の百合のぞ 米翁

西の空をあるきいづ 雲の峰 暮山

風薫る俳諧や女 夏の机 其香

人喜似もほ濁しふれ清水や 君水

水無月もろある松の硯が 青社

年向えやせめてたし 乃清水 小海



ワササッ〜登るての花搔 山東

そ風此ぬりもあつり交柵 金牛

うさ事一を積むや嘉定乃野菜物

と〜〜心斗の冬農菜さしけ

もれとせ〜〜早くも十三日に

いさ年もやうて嘉定の日数が 壺領

伽羅菴

風入きや月せの師のるの夜 其川

松杉の薫り暮あふや夏坐鋪 八川

今し花をの楮や古懐少 吞舟

伽羅其甲のせもかや今し風薫 泰卿

口に名の百万遍や夏念佛 赤白

ハ葉の蓮華重き忌日也 静好

ふさ里にの糸成る手向が 文魚

蚊嫌ひのそ信あし手向が 又文

百万の光の窓の燃虫一の形 魚潜

もろ蟬の墳乃色と時雨が 魚民

ひやーと急ぐ風のがまじや瓜戸

晩好

十之筋弾く玉琴や蓮のいと

神稻

百まの世子ありし時をそ業風

牙をそ委奇骨面よありてをそ

ちのつりか鉢鉢乃味を忘袂

螢る乃初莖子こそし止す

孫子こそ功かりし晋子の後なる

物ハ鬚鬚とて鹿麻の内を

論す我者存養の塾に入ると

いりも百一カと交るを此は真

逆之蔽衣をひつおの物とて

式ハ俳諧乃を式ハ古才史之

り鉄のん糸かたしはるし奈

面のありりに覚えて養ふに彼舊

抱ふものをも念敷をきてはまや
こしし十三日の祥月とありて
又我をさしし勤をさしし

冥テや見る夜子吃百語僊 山花

仕悉し蓮の發句を吟り 味道

そお降る雪ニや屋せぬ此午向 連馬

十とせぬ後り三伏もの袖寒し 待亮

夏の夜やオの鐘は袖の月 双兔

父の翠如師とてむつし

かりんかちとゆ伝りて

えをもあしす具もせぬ櫛の内床 翠如

虫テや十三鐘の集の敷 曾嵐

茶碗にもそ香残るや香需散 五岸

人多くすはむをわがことの
病床の吟を今も思ひ

出二の

つ宮

いく夜も又物の世薫る秋催ひ 蹄香

多る来る月日ハ早一水の葛 秋天

伊や清水子独る秋向をん 聴川

志帆子風薫て早一十二里 秋英

橋より子いあつがー昔人 秋笛

まわりやあつ十三鉦や夏の月 冬川

くふことに幸向をん蓮の十三句 佛無

蓮平抱ふ仙ハ安一膠ク付キ 苔尾

其集を見るほと暑 土用下 聲羽

云の葉の今も涼一や各五草 未又

折水を涼一ままその手向を 米棠

翼ちかく廻り早一嘉定人錢 春曙

消て又独る跡あ梨不二の鳥 西湖

あめのしるる 芦陰もあし羽後ふる 進歩

結城

琴をひく音や今も風薫 素雲

日盛りの十之越の 粟のあふ 卓夫

其年の暑もたぬしとて 萬玉

風月の涼しき跡や十と三ツ 亞提

百いよ霜の白集をくらげ返す

夏の部を見るとき涼しき音が 寒川

半五月やふれし空も月ハ泪 赤川

いよ師とて周れ返福

丁度な電もためて非時

よかおもてあまきあはる

くち形一の山吹餅や加定喰 音牛

朽ぬ名も探るに深し 苔のせ 白川

廻り来る風も涼しや暮の松 赤川

抱ふ岸の夢や昔をいかに 千丈

伊や蓮の臺も涼——きふ
穀城

生二則平一函をた形一

せきふれまを悔か

杜宇一墳の誌念やおく牛鳴
剗石

亡き跡のりしろはひりや蟬衣
青葙

西方乃御手のいとくし瓜の蔓
伊秀

其人の影おつじりや雲の嶺
斗葺

回り来る十三輪や土卦草
羨嵐

伊の牧屋もも透も夏の日
麴車

夏寒し蟬も其日を汰の色
花六

扇にもある教や毫の跡
壺天

伊もあ梨てや雲の峰つてさ
百柿

見一分る道のほかりやまじつ螢
百静

櫻鳥や暗涼しき星の色
扇棠

のほりぬた跡と薫るや風の助
菊明

午鑑の折目くくや土用ニ 大席

墓ヲ啼く蟬やいつこの道心者 泗川

伏の粉をむせてさほる目か 雪嶺

夏の日此廻りも早し車一百合 暮川

夏をさの百目の燦も手向が 自好

手向をぬ焙炉加減も夏茶が 石雲

目に餘る風の薫りや為羽折 一菓

粥のええ水も苦し苔のむ 万川

百家の御女をい世千親 野

かまけをいをと思か

虫ニや流削乃しも十三句 雪堂

は段のあをまきく世を

十三年の春杉をいけり

現を未来を起しらる

此いことをいさる

俳諧ハもろくも印又の風骨を
学んたと 雪川谷子の
御尤右に倚りて一く屯て平
今年一回忌日の御集ふも
一句を入るしとをりし
多きしと法被拍霜後
乃幸いと法被とてまじりし
涼さを跡をくしてもい清水

樗雲

交切りの茶湯とりわや世より
いく交もく一年向る
清秋

短歌や結ひおかせぬ夢の人
峯化する雲紫糸の夕日一のか
今より一百年あふ十三年此
忌にあふめさる僧法師を
清くして法を行えんを
雪川
白頭

たゞのひかりはをきて多ふれ
御座のまんぐあを白まつく
とたむふ常の仙の御名を
さえ唱ふるまとのあふんして
跌まひて物文の深き心を嘗
いふての知らんひて子遠津
し海根の人のかいらまは
多ふんくもりし故に九波

前林
白原
重田

謂る古又安梨夕顔の能子
極て秘藏を記すやまき
と語しし心をも思ひ出

尺白も墓又の名のしやを供糧 昔原

今月今日古墳千くはく
少くまうし往古又を思ひお

墓清水苔の粟や十余年 岩松

蘇維家
是乃深
也、我師
之、也立
是也、師
也、伊
錦を、之
は、

蘇維家
是乃深
也、我師
之、也立
是也、師
也、伊
錦を、之
は、

子安丸をうけて存将何りいふ
雪に松上より冊をうけて
編集はけいこの句をか
書留うきさるるもの
二師痛味云云いふ
をよみあはれと一我ら
ともアとともこの冊を
あかりしりゆめりし
神子

包に少子流し入るひめ持
存の談のからめしとも
袖に包はるるをいふ冊
有はるるものあはれし
をこころみに稗史さん
く後より手抄写し
をんをいふ未だ會
のたふしに題をい
百里乃

花の曙小旅泊乃思ひをのりけし
山眺望の月の夕アよま言捨る
きし一旬共自よりともたまを
きや有けんいふつ了申書は残
さきし一真句ありさきさき
筑波山の言まも持下のちるひちり
けり登らん小い志のしと長月の
るのあらし夜よを菊色粉薄と

捨ひ分けて採花取水の且を採雀
林の夕アすを一部とすし枕の
左右よりひちを 雪川谷子
ほのましし一追福の御
集る加へる公さんやと志す
候とをり希といちしやはん
おれよあれし句のし一あ
何れいともあし師の面月あ

眼目の乃々其罪を一人千すまを
其伝呈せしに却自序ハ櫻雲
千毫をろもあ公一部の校合
師筆を染らし是を櫻木千
うばしし世を寛を知らし
免よと辱し投しるあふ七師死
後の觀喜つ人の面目手の舞足の
誇し所を知らずは君といふは

過公の契りや深うらん千余年
芳苑の御伽う孫を抱き死後十
余年のこしし水手澤を穢
るはあし事しの思ひ多しをい
千端き分すのあも子書日キル
まのしんやと唯つ人三人物首九ね
やししをあらく書留えん
たしんぬ

丁酉夕暮

岩松

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

書之部

五日やもや逢坂の人通り

交電延由早乙女千免ていふを

福引子老をの角は氷をこけ

日本千市経うら梨をこつ霞

年柳子神路のたぐををみつめんを

書らんとてて大詠子頭中が

浦船や恵方詣の扇と境

く鳥のさるおるも思方 多きり
梅香や塙のくつきのさ何ひ茶屋
そきりまや園の中形形却亦の形
小殿ハホもひの外平んぬのを
とく 咲くハあまきこにこせぬ数の梅
もやしらに石木の梅のぼくもる
即つまのぬ児多きりぬけらなつし
ははのほききつと 茶 賣

清秋とすり多きは
平中上巻と前書アリ

小松菜子子ノ日のあとも引出ん
鶯の来つぬれもや 数あすは
くくひすやぬの道のすま柳
狗杞垣す柳のぬれすは
公玉や雨の柳のことく
青柳平一日くおく茶賣か

沾我母堂年賀

下^テ髪^ハ平^ニ雪^ノの柙^トい^ハし^トと^カら

よ^ク白^クな^リと^モち^ヤさん^ノ

春^ノ夜^ノの哀^き枕^ヤ籬^ノの箱

春^ノの夜^ノの哀^き枕^ヤ籬^ノの箱

春^ノのお^をを^りる^る梅^ハら^しし^し内^儀が^ら

猫^ノの恋^ハ戀^ノ日^數や^人の家

巨^燐か^らあ^のみ^る猫^ノの屋^けと^が

ト^ノ芝^啼て^り多^ねや^猫の戀

金^魚や^餅菜^る包^ム傳^ハひ

雉^ノの羽^子野^中の虹^ノの^うつ^りが

雉^ノこ^ひ子^油や^ぬ多^き雉^ノの^声

夕^霞の^もこ^しら^はの^鳥が

か^らら^せて^は彼^岸多^くや^佛堂^の

僧^一人^能と^も又^一す^其の^上

小^窓を^嘶す^折し^ト我^の

歌別

於長し古郷へかえ家ノの首
つをぬさえ喜の物とや捨題
莖立を揃へる船や漕きあう
苦いと云えぬ色形梨賣辭
幹と梨ハ大キ花の接穂をか
小刀のつき穂やきりてた支
海棠や唐のよし野のすけし桶

辛夷咲く唐赤の堂のわらびが
苗しゆや近江の景も抱させ
白雪千苗代もや一不ニの影
をるの中に御池の蛙一のふ
蝶をひんて画もいさる田中乃
榛おっや樹くの春の日照雨
草川や田のまら午の仏由の役
履並ふ鞠や上らんけりや

時政の休く度み潮三
雞合二重子の扇多はあふらせ
けー雞内裏の指をよも積み
樟腦の薫りいり豆の匂ふ宮
曲水ヤ人の情勢詩子酒を飲
己の後ひ辰えロカ老サ
詩所ヤ首の會るさめは雞の跡

赤雲園

野加鳥山八景

行く休や紅粉猪口洗ふ白椿
冥々食やりぬらり日永さ

朝露首を相伴出

春日息みき一時帰

白雲を履のたこまの化 朱五

あまの月のと

と 哉

衣斗いしと益ハ志満るまを月

龍身に物書日いて居め花も在り
多しち跡の重なるおちやまのゆ
屋根葺月の昔いこ上きいこまのや

何某席一画

毛纏るむい亭りく散りり
えるく平杣も櫻も伐らぬこ
まめむの雪ほけぬぬ年しり
むしあふこにや五日あれを

三日月在り細しりら櫻
岩藤やまに酔ふれ瀧の塵
跡の女のほろいそるまの春可ぬ
けり木の糸を張りくさくら鯛
又渡ちは柗桜を
やあさ櫛一幅にりさの小路が
角落て男しりく鹿のま
禪林や苔の跡掃く春の氏日

友之部

更衣條い多く長サの南
鶺鴒其夜硯の柄きくの
戸迷ひ平月を鑑きり郭石
町の夜い大いく志ふりほくま
杜宇松平風きき村の
横をり余情ふくきり子視
夢ぬくし富士の侍ちきり

昼をみぬつし哥人歩ゆくや鶺
鴒おらば 嘶の聲ほくま
芍薬や素間の會の庭掃 除

唐生の画題

犂牛夢の行幸の車か那
山勢林土をふまてり酔ふやかん
一条の平地交るや二条川
勝方し冠ぬまより競馬

塘江漕く水の高きや五つ雨
五月一日や生きた流る

墓

白翠月雨や筋遠くつれ格子
松山の見ゆれば日もあけ五つ雨
五つ雨く豆腐のうるせを浮世が
二十年歯の無ひ口へ新索ト
青梧や垣り登流鉤靴竿
切糸くも重くらさこのりる糸ト

牧の声を打ちたふりく耳のえい
水影や螢をかりの川 柝
雪月闇や螢をこころのたもと
客のたふすゝる無殊入る座鋪ト
雨しゆく中く虹の下をこ
雨の日やほろりしく候しき糸糸が
川向ひ半涼す多風くを

秋 部

ふとおしや衣を吹て 秋の風
あつちあや冠の上の天の河
御登壇の道平 葦舟とちりり
稲妻の名所くたをふ舟の
秋のちぬ流竹よ 梨枝のちりり
ぬ斗(搦)をほふり上げ多る様よ
清まると一里着きりり 屈の音
屈もちや 破き提灯 衣まりり

裏極の外し半馬をや ちりり
極経や扇きみの ちりり

悼市川八百三

魂極の棧鋪へ 本多の役者さ
天津へ遠寺の塔 ちりり
仲國ら芋を退け ちりり
猫と呼ぶ馬し ちりり
名月や雨を今宵の 琵琶法師

のえにゆく月の草賣の序 五

世をさし替へて月又なり

わが月かしくとたもあや母の傍

あうやうなり

片足もろ名所を踏へく月又なり

物へけ戻りの舟や中へてお

山陰や苔の尾の新酒蔵

谷ちきしせ屋あらのきりに野分が

蕃椒厨の道と見えへりり

たし桶の蓋えを蕪多やおの風

南天や人の居へるおるこのこ

志まていし花野り病ムと思ひり

戌向の成え六月十四日

病中えく吟ナリ

未枯や坊主のきり大工箱

うら枯や賣ともありに松白田

栗の穂も肥しく桑もれぬ鶉が
ホカ荒や田舎の背戸の多るに
秋冥しく目白押合ふ梢の
於石に洪押をぬる羽可な
一人旅洪柿喰ふ顔も誰
能ひ栗の虫の喰ふこけ字世を
いらくの草も葉も其うひるゆ
芋もむや音毎川の名にも似す

何とぞおもしろものある物も
岩の影も月夜の鹿のけさ
耳立つる鹿も尾越の遠音
たく山やねくも又鹿も桑
物数あるのり行物もす夜冥
人息のおやぬくも嘶の
下部等も出へし嘶のおや
雲おふや所も山のかの

さう草や、蕨の雨のあゝの辰
浮山木のそいゝくたをまのこが
老のぬわの室に平臥

—— 三也

水音や巖伽浮サを時の葉ハ星
喧嘩こゝろ菊を休ハ一酒屋ガ
白菊ハ古々々をこ我ハ白ムルマ
山川ハ麻の節をけく秋の水

時つゝや山寺えへて秋乃水
長き夜ハ軒もた月のみかきガ
黒染をたむふおオもお長ガ
夕昏の朝熊熊をヤ十三夜
立割ハ耳紅染了舞る温泉入ガ
あゝお糸坊くく刺針電ハ億オ記
息つ茅と袖の小原ヤ岩抱
絶へ付く長垣道ヤ下お楓

鹿笛の盛男の壬女のこがきぢ
くるしこし枕くほせや秋の夢

冬 三 郊

ちろ冬ハサ菟斗 頭中可南
灯をけの画馬に社歌の時雨が
柿賣のぬひてかきめや村時百
他ふもい濡きてや鹿の夕時雨
竹着戸や庭の落葉を覗く僧

落葉掃く小僧帯に負ふ梨
又この日の南子入あや小鳥納
ロキヤ殿おらうのに老の女

傾 廊

魚包の其跃中又知られ
松風の朝あことと又納豆が
納豆が濱名の橋の音絶一
揖をの寐る小便らちを千尋

いそろ風平片側町や夷、隣
孫震よおおあまのり冬
のりや物かけらみの舟も又
敦味盆の片手ぬ網や水の鷺鳥
煙い火や人あそびお半静い
色黒き山灰盡具の親も山灰賣
后宮の裾ひろがりや相火桶
埋い火や鳥志し啼く圍の上

巨糠にアし鹿啼く山を注り
壁際の炉火平鄰と語るこ
小ふす伎のつりおチか一ま葎がせ
端坐の子ばらや老とあめ物を
髪及衣の供平刺らうし小僧び
藍汁の老嚙といふをアセヤさん
葎煮るや浮世のひりを律坊主
鷹鳥の上平霰多をーい笑まが

狂僧の又逢ふりくにおの朝
庭の樹を多むくしの喰ふやおの
神楽ある森の外面の夜帝が
矢走舟氷をやく着きにり
近江鮎宇治の網代りや
鯨鯨や名所多きが腕の内
振むくや蓋の二つを忘き貝
唄むくも砂を逆は波のかつぎや

喰ひ塩のころもたのき才早いりに
冥の声を鬼とや茶屋の客をひき
空を念仏おのりあまを獨り
梅のしり宿札探め闇の中
ちの雪を人を問はちや起時分
大雪の日もる鳥林士の烟のち
雪の山に地と知玉て敲まらり
音くらん袋の人撞ぬ雪乃鐘

又ぬ雪の降おらぬめし仲の船
大雪の馬の額平磁石の形
月代の尻目通ふや替の雪
三井寺へ参るや比叡の雪丸
灯乃形定まぬやおの雪
雪の日を居風呂肩ふて山路が
赤き実の雪かく下におもとのか

雪川百子名改

白雪や水とたけりまゆの三筋
表手しるゑ草葉の葉も霰が
寒く赤や日ハ十分にかり細
心茶室や庵子這ふ子の美し
壁越し子貉を這ふや冬の雨
雪空平塙根の殿や寒く代り
如松子名改
寒く磨きの折紙ひく懐ふが

枯草了傾城所の入日、
萩をくまの野守乃鏡紋枯れぬ
魚河岸や雨相舞き塵の上
あ玉妻うしあひ

十月や余所吹く風も似し我む
南海ら刺髪
父と青くつ先ともくん従う拍

十日はく暮るくやうし年のいも
行年や陰未かいあうし芝居沙汰
けうしや鯉も五尺の五廻し
くし息を志うも朝からす郎あかり

歯落唇冥し

歯落しけむる喰いぬ年冥し
麩斗餅子あをみ、取を銘り
あを喰ふ執言おけりや年忘

大年や常闇の夜を大神樂
餅多(る)米搗く音や年深一
層神の瓢十とのえん席季米
行年や江戸に出るは江戸の人

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

南無阿彌陀佛書



故花園

知學館藏書

